

藤井本系『住吉物語』についての一考察

——「はまちどり」の歌の位置と挿絵の關係——

伊 藤 学 人

はじめに

『住吉物語』は伝本の多いことと異本の多いことで知られている。そこでよく行われるのが、A本とB本の本文を比較して、「ここがこう変わっているのは、改作者がこれこれの意図をもって改作したからだ」という種類の論である。

『住吉物語』の多くの異本をこのパターンで説明しようと思えば、それはおそらく可能であろう。しかし、それが必ずしも射ているとは限らない。限られた視野の中でのみ考察すると、かえって事実を見失う場合もあると危惧されるのである。

友久武文氏によれば、『住吉物語』諸本は少くとも一八系統に分類される⁽¹⁾。したがって、右のような考え方でゆくと、少くとも一人の△一定の見識をもつ改作者▽を設定しなければならなくなる。なぜ『住吉物語』に限ってそのように多くの△見識ある改作者▽が輩出したのか。あまりに不自然ではあるまいか。

そもそも、それ以前に、A本とB本を比較するとして、両本に直接關係がある（と推測される）のならばともかく、諸本の關係が分明でない現状では、短絡的すぎるのではないか。仮に、A本とB本

の間にC本が介在するとすれば、A本とB本をストレートに比較して一体何程の意味があるのか……等々、さまざまな疑問がもたれるのである。

筆者は、『住吉物語』が主に絵巻・奈良絵本のかたちで享受されたと考えており、このことが異本發生の主要な原因であると推測している。したがって、単に机上で一字一句の差異を検討するのではなく、広く文化的背景に目くばりをし、できるだけ無理のない自然なかたちで諸本の伝流を説明したいと思うのである。

本稿では、些細なことがらではあるが、このような視点から若干の考察を加えてみたいと思う。

一

少将は姫君の噂を耳にし、筑前という女を使って文を贈る。

はつしぐれけふふりそむるもみぢばの

いろのふかさはおもひしれとぞ

（成田図書館本—以下、成田本—による。）

表記は私意によつて改めた。以下同様。

しかし、姫君は「顔うち赤めて、とかく聞こえ給は」なかつたの

で、少将は、

いよいよ心そらになりて、「初めはさのみこそは。またまたも聞こえさせよ。このこと叶へたらば、この世ならずこそ思はめ」とのたまへば、(筑前)「かやうのことは、年まかり老いぬれば、すぎずきしきさまに侍れども、君のかくおぼしめしおはせらるることなれば、いかでおるかには」と聞こゆれば、うれしきこととて、また文書きてたびければ、筑前取りて侍従(姫君の乳母子)に聞こゆれば……。(成田本)

と、再び文を贈つた。

成田本にはその歌は書かれていないが、多くの伝本はここに一首の歌をもっている。それは、

はまちどりあとはかりだにしらねども

なほたづねみむしほのひるまを

(宮内庁書陵部所蔵写本一以下、御所本一による。)

という歌である。

この歌については、流布本系から広本系にわたる多くの伝本がこの位置に収載しており、また、「この前はお返事をいただけませんでした、今度こそはと思ひまして……。」という歌意からみて、後世の増補ではなく、本来ここに位置すべきものと思われる。

ところが、一部の伝本はこの歌を物語の後半部分、住吉へ逃避した姫君が都にいる父・中納言に送った長歌の反歌として載せているのである。たとえば、天理図書館所蔵・藤井乙男旧蔵写本(以下、藤井本)、吉活字本、無窮会図書館所蔵写本(以下、契沖本)などがそれにあたる。

しかし、一方、尾張徳川家所蔵の『住吉物語絵巻』などを見ると、

長歌の反歌としては次のような歌がみられるのである。

おもひやれあさちがはらにおくつゆの

きえもやられぬたびのけしきを

継母の奸計を逃れ、住吉に流離している姫君の心情を吐露したものと適当であり、この反歌をもつ伝本も多い(白田甚五郎氏所蔵写本、住吉神社所蔵写本、横山重氏所蔵絵巻など)。「はまちどり」の歌も「父上のお手紙をいただくことはできませんが、また折をみて御連絡いたします」の意に解釈できなくもないが、「はまちどり」と「おもひやれ」の二首を反歌とする伝本が見出せないこと、多くの系統の伝本が「はまちどり」を少将の歌としており、反歌として載せるものは少数派(系統として)であること、等の理由により、やはり「おもひやれ」が本来の反歌であり、これが失われたのちに本来は少将の歌であった「はまちどり」が取って替わったものと推測される。

それではなぜ「はまちどり」の位置がこのように移動したのであろうか。一般には△一定の見識をもつ改作者▽を設定して、その改作者がある意図のもとに改作したと解釈されるところであろう。しかし筆者はそうは考えない。それは次のような理由による。

成田本と藤井本を例にとって考えてみよう。成田本系は現存本の祖本に最も近く、諸伝本はこの系統から派生しているとみられる。このことと、多くの伝本が「はまちどり」を少将の歌としてもっていることを考え合わせると、成田本系も本来は「はまちどり」を少将の歌としてもっていたに相違ない。したがって、成田本系と藤井本の表面上の大きな差異は「はまちどり」の位置だけということになる。しかし、たった一首の歌を移動させて満足するような△改作

者Vは想像のしようがないので、右のような解釈はまず成り立たないと思われるのである。何かもつと別の理由があるに違いないのである。

上述のように、筆者は、『住吉物語』が絵巻・奈良絵本として伝流していったことが異本を発生させた原因であると考えているので、この視点から右の問題を考察してみたい。

二

「はまちどり」の歌を反歌として載せる伝本は少数派（系統として）であるが、流布本系（藤井本など）と広本系（契沖本など）にまたがっている。成立順からみれば流布本系の方が古いことはまず間違いないので、ここでは藤井本によって考えてゆくこととする。藤井本の系統はおそくとも室町末の成立とみられ、現存諸本の中でも古い部類に属しており、また最も古態を残しているとみられる成田本にきわめて近い本文をもっている。

さて、筆者は、改作『住吉物語』の原本は絵巻であったと考えているが、この原本が順次転写されてゆくとして、絵巻（奈良絵本を含む）として写される場合と、絵を除いて写本として写される場合の二通りのケースが考えられるわけである。したがって、たとえ現状が写本であるにせよ、その粉本をたどってゆけば必ず絵巻にたどりつくことは疑いないのである。

現存諸本の中で最も改作原本に近い鎌倉期の絵巻の本文が成田本にきわめて近いところを見ると、成田本がA成田本系の絵巻Vの詞書を写して成立したものであることは疑いない（注2参照）。したがって、成田本ときわめて近い本文をもつ藤井本も、同じA成田本系

の絵巻Vか、あるいはA成田本の粉本に近い絵巻Vから出ているものと推測し得る。

この系統の絵巻が伝流していった藤井本に至るとして、藤井本とかなり近い関係（時間的、本文的に）にある絵巻（藤井本の二・三代くらい前をイメージする。以下、藤井本祖本と呼ぶ）の成立時期が一体いつ頃になるか、ということが次の問題となる。「はまちどり」を反歌とするものが少数派であり、あまり流布していない（系統として）ことからみて、それほど時代を上げることはできないと思われるが、一方、藤井本系の横山本が室町末の成立とみられるので、それらを勘案すると、およそ室町中後期というところが妥当な線ではないかと考えられる。室町中後期といえは奈良絵本が盛んに制作されていた時期であり、おそらく藤井本祖本も奈良絵本であったと思われる。

以下、このような推測にしたがって「はまちどり」の問題を考えてみた。現実に存在しないものを想定するのであるから、若干恣意的な論にならざるを得ないが、ひとつの試案として提出してみたいと思うのである。

三

「はまちどり」をめぐる問題については上述の通りであるが、実はこの問題は単独に存在するのではなく、もうひとつの問題と連鎖になっているとみられる。それは筑前の性別の問題である。この点を明確にするために、主要な伝本について「はまちどり」の位置と筑前の性別の関係を一覧表にしてみよう（表参照）。

築前	築男	はまちどり		名本	類別
		反歌として	少將として		
	○	○		藤井本	一
	○	○		古活字本	
	○	○		学習院本	
	○	○		岩瀬A本	
	○		○	白田本	二
	○		○	住吉本	三
	○		○	岩瀬B本	
	○	○		契沖本	四
	○		○	正慶本	五
	○		○	御所本	
	○		○	陽明本	
	○		○	大東急本	
	○		○	真銅本	六

〔表〕

表で明らかのように、「はまちどり」を反歌とする本は必ずといってよいほど筑前を男としている。たとえ藤井本では、

右大臣のはした者にそらさへといふ者のおとこにてありける、
下仕へになりて筑前と聞こゆるなむ、中納言の宮の世まではと
のもりの大夫といふ者の男にて侍りければ、朝夕にこの姫君を
ば見聞こえけり。

となつてゐる。誤写と改変が加わつてゐるので、文意があまり明確ではないが、ともかくも筑前が男として認識されてゐることだけは疑いない。本来は次のような叙述になつてゐる。

右大臣のはした者にそらさえといひけるが、おとなになるままに筑前と聞こゆるなむ、中納言の姫君の母宮の家司にてとのもりの大夫といひける者の妻にて侍りければ、朝夕にこの姫君を見聞こえけり。
(成田本)

ここですぐに思いつくのは、まず「おとな」が「おとこ」と誤写され、それに伴つてつじつまを合わせるために若干本文に手が増えられたのであらう、ということである。たしかにそうに違ひないと思われるが、しかしそれは「はまちどり」の歌とは無関係なことがらであり、この理由だけでは筑前を男とする本に限つて「はまちどり」が反歌になつてゐる現象を説明することはできない。このふたつの問題を結びつける理由を考える必要がある。

さて、前節で述べたように、藤井本祖本は奈良絵本であつたとみられるが、奈良絵本というものは要するに挿絵本である。つまり、鎌倉時代の『住吉物語絵巻』が少將と姫君の恋に焦点をあてて絵画化されてゐるのに対して、奈良絵本は恋の場面や継子いじめの場面などを挿絵的に配置してゐるわけである。

そこで、まず、「はまちどり」の歌は少將が姫君に贈つた歌であつたと、そのあたりに挿絵があつたとすると、おそらくそれは挿図1のような絵であつたと思われる。挿図1は某家所蔵の奈良絵本(広本系)で、筑前が侍従を通じて姫君に少將の文を手渡す場面である。多くの本によく見られる図様である。

次に、挿図2は同じ本の、住吉に逃避した姫君が小童を使って京の父・中納言に長歌を送る場面である。藤井本祖本の当該場面に挿絵があつたとすると、おそらくこのような図様であつたものと思われ。簀子に控えているのが小童(男)で、本文には次のように紹



挿図1 某家所蔵・奈良絵本『住吉物語』より

介されている。

(姫君は父・中納言に)「生きてあるとばかり知らせ奉らむ」とて、尼君のもとに小童の京より具したりしに、「しかじかのところに持ちて参りて、いづくよ」と言はで、この文奉りて、さて逃げかくれね」と、よくよく教へてけり。(藤井本)

ところで、奈良絵本というものは、制作の場の相違によるさまざまな差異はむろんのこと、その時どきの書写の都合によっても、挿絵の数や本文と絵の位置関係等に大きな相違がみられるものである。そこで、藤井本祖本が挿図1・挿図2のような図様の挿絵をもっていたとして、次のような状態を想定してみる。

(1)挿図1・挿図2とも人物指定はなかった。



挿図2 某家所蔵・奈良絵本『住吉物語』より

(2)挿図1には「はまちどり」の歌が書き込まれていた。(現実の挿図2を見ればわかるように、本文が挿絵の前の頁に収まりきらずにはみ出した場合には、このように両中に書き込まれる。ちなみに成田本に「はまちどり」が欠失しているのは、絵の中に「はまちどり」が書き込まれた本の本文だけを書写したためかとも想像される。なお後述の旧東京教育大学本や横山重氏所蔵絵巻などのように、絵の中に歌を書き込んだ本も存在する。)

(3)挿図2はちょうど長歌の近辺に位置し、本文等の書き込みはなかった。

(4)筑前を男とする誤写がすでに存在していた。

まず、このような奈良絵本を想定する。その上で、さらに次のよ

うな想定を重ねてみるとうなるであろうか。すなわち、錯簡あるいは制作上のミス（つまり挿絵の貼りちがえ。このようなことはま見受けられることである。たとえば旧東京教育大学所蔵の奈良絵本一零本、現在卷子装一などをみると明らかに制作時の貼りちがえが認められる。なお、錯簡の場合は右に想定した本について、貼りちがえの場合はその転写本について考えることになるが、可能性の高い貼りちがえの場合で考えてゆくこととする）で、挿図1と挿図2が入れ替わったと想定してみるのである。なぜそのような想定が可能かといえば、筑前が男になっているからである。つまり「男にてありける、下仕へになりて筑前と聞こゆるなむ」とある本文に引かれて、本来は住吉の使いである小童をついっかりと筑前と誤認し、貼りまちがえてしまったと推測されるのである。以下、混乱を避けるために、順序立てて考えてみよう。

(一) 挿図2が本来の「はまちどり」の位置にきた場合

挿図2には女性が二人、そして小童(男)が描かれており、二人の女性は文を手している。この小童が筑前(男)と誤認されたこととすると、この図は筑前(男)が侍従を通じて姫君に文を手渡す場面となり、本文との間に矛盾を生じることはないので、さして疑問はもたれないに違いない。そして「はまちどり」の歌はこの場面から姿を消すことになる。

(二) 挿図1が長歌の位置にきた場合

挿図1には女性が三人描かれていた。本文では姫君・侍従が小童(本文には性別は書かれていない)に文を托す場面になっているので、簀子の女性のいづれかが小童と解釈されたに相違なく、本文と矛盾しないのでこの場合も疑問はもたれないであろう。そしてこ

に「はまちどり」の歌がはいることになる。この本が次に転写されたときに、長歌の反歌として本文中に取り込まれていったと推測される。

このようにして、藤井本の親本に該当する奈良絵本が成立したのである。

*

一般に、奈良絵本は本文と絵が分業体制になっている。それは、たとえば絵の中に前の頁に書ききれなかった本文が書き込まれていることとか、絵の貼りちがえはなほだしい場合は他の作品の絵が貼り込まれていることもあるといったことなどで明らかである。同一人物が本文と絵を順を追って書写しているのなら、まずあり得ないことである。奈良絵本を制作している工房では、同時に他の作品も制作しているに相違ないので、分業はいわば生産性を上げるためのシステムであろうが、かなり大まかに作られているという事実是否定できない。右のような想定は理由のないことではないのである。

四

次に、この藤井本の親本がさらに転写される場合を考えてみる。写本として写される場合は藤井本そのものになるわけであるから、これは除外し、奈良絵本として写される場合を考えてみよう。

上述のように、藤井本の親本では、挿図2の小童が筑前(男)と解釈されるに違いないのであるが、現存の奈良絵本から判断すると、筑前が出てくる場面は他にもあったはずである。たとえば、少将が筑前に文を手渡す場面、継母が筑前を語らう場面などである。

しかし、これらの場面では筑前は女として描かれているに相違ない。絵というものは一般に粉本の構図・図様を踏襲してゆくものである。同じ本の中で筑前が男として出てきたり、女として出てきたりすることになる。したがって、次に転写されるときに、筑前の性別の問題がどのように処理されるのか、興味もたれるのである。

先にも触れた通り、筑前が登場する場面としては、

(a)少将、筑前に文を手渡す。

(b)筑前、姫君に文を伝える。

(c)継母、筑前を語らう。

などが代表的なもので、どの奈良絵本を見ても、必ずこのうち一、二場面は含まれている。いま、(b)の場面では筑前は男になったのであるが、(a)(c)の場面では依然として女に描かれているはずなので、転写の際の場面選択の仕方等によって、次の三通りの可能性が考えられる。

(1)男の筑前と女の筑前が混在する (b)を含む二、三場面を選択し、忠実に転写した場合)。

(2)女として描かれる (a)(c)を選択した場合、あるいは意図的に女に統一した場合)。

(3)男として描かれる (b)を選択した場合、あるいは意図的に男に統一した場合)。

そこで、現存本について見ると、(1)のケースはまだ見出してないが、(2)と(3)についてはそれぞれ該当する本が存在する。「表」のところで用いた資料でいえば、岩瀬A本が(2)に該当し、学習院本が(3)に該当する。おそらく(1)のケースも探せば必ず見出すことができ

るであろう。上述のように、絵というものは粉本の図様を継承してゆくものであり、それゆえに鎌倉時代の『住吉物語絵巻』にみられる構図が近世の版本にまで受け継がれてゆくのである。また本文と絵が分業体制になっているということを考え合わせると、本文が多少変化したくらいでは絵は変わらないからである。むしろ学習院本のように本文の変化と絵が対応しているケースの方が珍しいと言える。現実には岩瀬A本のように、本文では男になっているが絵の中では女として出てくる、という本の方が多いのであるから、学習院本のように絵が本文に伴って変化してゆくには何か引金となる原因がなければならぬと思うのである。そのことを「はまちどり」の問題と絡めて考えてみたのである。

おわりに

一首の歌が位置を変え、登場人物が女に描かれた男に描かれたりしている事象を、文化史的な視点から考察してみた。現実が存在しない本を想定しているので若干恣意的な感否めはないが、基本的な考え方は間違っていないと思う。少くとも八一定の見識をもつ改作者✓を設定する論よりも蓋然性は高いと考える。

従来、国文学の分野では、絵の方面が比較的手薄であった。しかし、絵巻や奈良絵本は絵と本文がトータルなかたちで享受されたわけであるから、当然研究してゆく上でも両者を総合的に考えなければならぬのは自明の理であろう。広い視野を持つ必要があるのである。

(昭和62年3月31日稿)

〔注〕

- (1) 友久武文氏「住吉物語の諸伝本について」『伝承文学研究』第20号、昭52) など。
- (2) 拙稿『住吉物語』諸本と絵巻詞書の関係―『風葉和歌集』所載和歌の欠落事情―』『国語と国文学』昭60・8) 参照。
- (3) 友久武文氏「住吉物語の異本群と代表本文」『国文学攷』第52号、昭45) によれば、藤井本とほとんど同文の横山重氏所蔵写本は室町末の成立であるという。
- (4) 拙稿『住吉物語』の改作についての私論―絵巻資料を中心に―』『中世文学』第31号、昭61) 参照。
- (5) 系統分類・伝本名は桑原博史氏『中世物語研究―住吉物語論考』(昭42、二女社) に従った。なお、表中の岩瀬A本は緑表紙本、岩瀬B本は藍表紙本をさす。
- (6) この点については、すでに友久武文氏の指摘がある(注3の「住吉物語の異本群と代表本文」)。なお、友久氏が同論文で述べられているように、契沖本は藤井本の影響を受けて成立していることは疑いがないので、契沖本が筑前を女とする例外については無視し得る。

〔付記〕

御指導賜りました稲賀敬二先生に厚く御礼申し上げます。

(光華女子大学・非常勤)